〈付1〉一茶句試論

A・“無国籍俳人”小林一茶

一　童心に帰る

一茶は三歳で母を、一四歳で母方の祖母を亡くし、一五歳になってひとりで江戸へ向かった。その時一茶は、信州柏原という故郷を失ったように感じたであろう。それから俳諧一筋に生きようとした。しかし結局、俳諧師と認められず、一人前の江戸住民になれなかった。一茶は、最晩年の地元俳諧師時代を除けば、どこにいても、いつも他人であった。

芸術には国境がないと言われている。言い換えれば、芸術家たちはどの国にも縛られないということが大切である。だから、安心できる居所がなかった小林一茶こそ、日本を代表する大詩人であると、僕は思っているのである。

一茶熟年の作品には、農的感性をもちながら、世界万国に共通するほどの自由な詩的発想による表現が多くみられる。これからは、一茶の伝記的背景や通常の一茶像を忘れて、作品そのものをうかがいたいと思うのである。

鳴猫（なくねこ）に赤ン目（あかんべ）をして手まり哉　　（八番日記）

一緒に育ってきた幼児と猫が、一緒に年を越す。二つの小さな生命（いのち）の間を、手鞠がはしる。手鞠は小さな地球のようだ。単純なおもちゃだからこそ、動物も人間も共に遊べるものだ。今の日本の子供たちに人気のあるゲームなどなら、おそらく猫はやって来ないただろう。

ところで、この句では、動物は先に述べられ、人間はその後、「赤ン目」という表現で言外にほのめかされている。表現上でも、人間は動物に勝っていない。そこに一茶晩年の世界観が現れていると思う。小さな動物と小さな子供が、お互いにいたずらをしながら、無邪気に共生している。一茶は、大人が忘れていた何かを、この光景にみた。人間は、もともと言語を使わないでも他の動物と通じ合うことができるのだ。それは不思議な「以心伝心」のような能力である。言葉の話せない子供でも、その能力を持っている。こうして、ごく自然に万物と通じ合えるのは、子供と聖人だけだと一茶は信じていたのだろう。俳聖になれなくても、子供や動物の無心を見習えば、「真の風雅」を理解することができると信じていたのである。

ところで、晩年のピカソはこう言った。「私は子供の絵のような絵を描きたいと思って、一生やってきた」。一茶晩年の自筆をみると、書体にもわざとらしい幼稚性が目だっている。晩年の一茶と晩年のピカソは、もし会うことができたとすれば、きっと親友になれたような気がする。

凧の糸引とらまくて寝る子哉　　（文政句帖）

『七番日記』には「凧抱いたなりですやすや寝たりけり」とある。たしかに主人公である子供をほのめかしたところがよい。しかし、僕はやはり「凧の糸」の句の方が好きだ。

春の凧揚げよりも、何となくお正月の凧揚げを想像する。お父さんに作ってもらった凧は、男の子の自慢のおもちゃだ。まだ上手に操ることはできないが、いつかは村で一番天高く飛ばせたいと、男の子はひたすらに夢をみている。一日中凧揚げの練習を続けていたので、ついにくたびれて家に帰って直ぐに寝てしまった。しかし、両手でまだ大事な凧の糸を握っている。寝ながらも糸を引っ張ったりしている。きっと、眠りの中でも凧揚げの練習をしているのであろう。一途に夢を追いかけている息子をみて、一茶は、自分にそっくりだな、と感動したのか。一茶の場合は、「一流の俳諧師になる」という「夢の糸」は何度も切れそうになったが。文政時代についに故郷に一茶の弟子が集まり、夢が叶えそうになったが…　江戸ではない。「君も自分の夢の糸を引き捕まえて！」と呟いている一茶の声が聞こえるような句である。

亡き母や海見る度に見る度に　　（七番日記）

やはり、一茶の場合、童心くのあこがれには独特の理由があるのかもしれない。一茶は、たしかに子供がもっている動物的な無邪気さや夢をみる力をよく讃えた。そして、老人一茶は、たしかにわざとらしく子供のような字を書いていた。しかし、彼には子供らしい子供時代がほとんどなかったといえる。先に述べたように、一茶は三歳の時に母親を失い、その後父親の後妻と仲が悪く、十五歳で奥信濃を出て、当てもなく江戸へ上京した。彼はおそらく十四歳で初めて海をみたことだろう。その日から、海をみる度に、実の母を知らない一茶は、自分の人生の儚さを感じるようになった。「母」と「海」という二つの漢字は、なぜか似ているが、フランス語でも mère（母）と mer（海）の発音は全く同じである。ところで、七年前に仏コートダジュールで僕が初めて作った日本語の俳句は「だいだいの花にひかれて母の海」である。ただ、僕の場合は、地中海生まれの母が今も元気で生きている。そして、僕の俳句は平凡な取り合わせだ。一方、一茶は、おそらく覚えのない実の母に捧げて、無季の句を詠んだ。やはりここも無季の句は死を表すものだ。それは、自分を産んでくれた亡き母への永遠の愛を詠んだ発句である。子供時代を非運に奪われた一茶は、老人になっても、どこかで大人になりきれなかった。しかし母への「純愛」が込められたこの発句こそ、世界中の詩人や芸術家に通じる詩心があらわれた傑作であろう。

11　人間という物

雪車（そり）負て坂を上（のぼ）るや小（ちい）サイ子　　（七番日記）

子供はとても小サイ。雪車（そり）は子供の背中を隠すほど、とても大きくて重いものである。そして山は雪雲まで果てしなく聳えてゆく。おそらくこの雪車（そり）は子供用のおもちゃではなく、薪を下ろすための道具であろう。大人が使うような大きなものであろう。

同『七番日記』に「しなのぢの山が荷になる寒哉」がある。里雁山の麓に住む人間にとって、冬の山は怖いものだ。ところで、江戸時代、信州の方言での「コワイ」は「疲れた」という意味で使われていた。たしかに。信州の冬は怖いほどに疲れるのだ。『父の終焉日記』の別記によると、一茶は、幼い頃から一年中農作業に手伝わされて、好きな勉強もできず、辛い思いをしたという。ところがその後、一流の江戸俳人になった一茶が都会人にない逞しさをもって生きていられたのは、辛い子供時代のお陰だったに違いないと思う。

さて、もう一度雪車（そり）の句を読んでみよう。あまり知られていないものである。この句に、人間が最後に出てくる。また、人間は自然の中のちいさな一部であるという印象を受ける。

一茶調は、「人間くさい」俳風であるとよくいわれているが、僕はそう思わない。たしかに晩年の作品には、人間、とりわけ農民が度々現れている。つまり、俳人一茶は現代でいう「花鳥諷詠」だけでは満足しなかったといえよう。ただし、人間を自然から切り離して描くような発句がほとんど見あたらない。逆に、一茶晩年の発句を読むと、人間と自然環境との距離が非常に小さいような気がする。たとえば、

母親を霜よけにして寝た子哉　　（八番日記）

という句には、二人の人間が登場する。しかし、発句の重心は、人間にあるのではなく、骨までしみるような霜夜の寒さにあるといえよう。丸くなって赤子を守る母親の手を霜よけの覆いに喩えるのは、言語学の用語を借りれば「擬物法」という比喩である。母親が自分の赤子のためのグリーンハウスになったという軽妙な比喩である。実は、一茶の発句や俳文には、このような「擬物法」が非常に多いという事実が最近の研究で明らかになってきた。僕が調べたところ、『父の終焉日記』の文体にみる比喩表現の七割以上が、こうした「擬物的表現」であるということがわかった。

従来、「やれ打な蠅が手をすり足をする」のような擬人化が一茶調の大きな特徴とされていたが、一方、人間をその他の生物・無生物のように扱うという逆の表現法も一茶の作品に非常に多くみられる、と注目しなければならないだろう。

蝶とんで我身（わがみ）も塵のたぐひ哉　　（七番日記）

ところで、「擬物法」という表現法は、手法として「擬人法」の逆のものであるが、人間とその他の生物・無生物との区別をなくすような表現であり、その点に関しては、擬人法と同じ発想から生まれたものとみることができる。事実、農村史の研究によると、擬物的表現は、擬人的表現とともに、世界中の農村地帯の方言によくみられる、ということがわかる。たとえば、フランス農村史論『風土の臨終』(*La fin des terroirs*, Fayard, 1985)に、ウジェン「ヴェ」氏はフランスの方言に用いられるいくつかの例をとりあげている。

> オード渓谷の方言では、川を無生物ではなく、人間のように扱うことになっていた。人は、オード川に対してほとんど定冠詞を使うことがなかった。“オードに会いに行く”と言い、“オードが高くなった”と、“オードが怒っている”などといった表現を使っていた。(中略)また、ブルターニュ地方の言葉は(現在に至っても)精彩に富んだ比喩表現に溢れていた。うぬぼれた人は、“船の帆のようにふくらんでいる”と言い、あちこちから借金して暮らす人は“釘で生活している”と言い、または、状況に応じてそれぞれの相手にいつも違うことを飾って言う人について、“彼は笛を作る木で出来ている”と言ったりするのであった。

もしかすると、農村地「に住む人間の比喩的表現は、万「共通の感性によるものなのかも知れない。とくに、人間を別扱いしないという擬物法や擬人法は、万物の一体性を「調し、おおらかな世界」を生み出すことができる。それはいわばアニミズム的な世界」であり、文「史上では、農民の出であった小林一茶以外にあったにみられない世界」だといえるかも知れない。

一茶晩年の作品には、このような農民的感性が溢れて、われわれ現代人が忘れている世界」が現れているのであろう。

結局、江「で俳諧師に認められなかった一茶こそ、現在においては“農村の大詩人”として世界中の詩人や「究者に見直されて、その作品の正しい理解がついに「がってきたといえるのではないか。

椋鳥と人に呼るる寒(さむさ)哉　　(八番日記)

三　アザーネーチャー

春の月さはらば雪たりぬべし　　(文化句帖)

「もし人間が月を触ることができたら、きっと雪のように解けてしまうだろう」、と一茶は思う

たのか。天文学者によると、月はただ乾燥した惑星であり、地球からの距離はおよそ四十万キロメートルである。一茶の腕はおよそ五〇センチメートルだろうか。そういえば、『七番日記』に「あの月をとつてくれろと泣子哉」という名句がある。やはり一茶は天文学者の見方より、子供の見方をとるのだ。われわれ二十一世紀の人間は、科学をもって「月」という惑星の実態を理解したつもりだ。しかしそれで幸せを手に入れたわけではない。逆に、「月」の神秘的な存在を信じなくなり、自分たちの手によって大切な夢を壊してしまったような気がする。もう一度一茶の目で、子供の眼で月を仰ぎたい…。

一九六九年には、ネイル・アームストロングは左足を先に出して、しっかりと月面を踏んだ。一八二〇年には、一茶は手を伸ばし、朧月に触ろうとした。しかし、アメリカの宇宙飛行士よりも、一茶の方が「月の心情」を理解したと僕は思う。「月」というものは、限りなく瑞々しく、泥の地球に棲むわれわれの心を洗うために回っているようなものであろうか。人間は、月を掴めないからこそ、純粋にその夢をみることができる。ほんとうは月は聖母マリアのような存在である。

むまさうな雪がふうはりふはり哉　　（七番日記）

信州人の一茶でも、降雪を喜んでみることがあった。春の雪なら、積雪の心配もないからだろう。春に入ると、吹雪という鬼は牡丹雪という美しい妖精に変わる。もし日本語にも男性名詞と女性名詞があったら、きっと冬の雪は男性名詞で、春の雪は女性になっていただろう。春の雪は食べたくなるほど愛らしいものである。やはり芸術家である一茶にとって、自然の美しさは天からの糧のようなものであった。

実はイエスキリストも天の恵を食料にたとえたことがある。最後の晩餐の時、たまたま食卓にあったパンと葡萄酒を指し、「これは私の体である。これは私の血である」と弟子に告げた。ところで、もしイエスキリストが日本に生まれていたら、白ご飯と味噌汁を指して同じことを言っただろう。そして今ころ、世界中の教会で、白ご飯と味噌汁で生体拝領が行われたかもしれない…

自然からいただくものはすべて神の意志によるものであり、天からの糧である。雪が食べたくなった一茶は、このような世界観をもっていたのではないか。

『易経』にも書かれたように、「至哉坤元、万物資生」。この地球はわれわれ人間にとって、唯一の支えである。ものはすべて、大地からはじまる。農民の出であった一茶は、誰よりそれを知っていたのだろう。

雪とけて村一ぱいの子ども哉　　（七番日記）

雪が解けた。村に子供が増えた。その二つの出来事は直接関係がない。しかし上の句と中下の句はぴったり合うのだ。なぜならば、雪解水にも子供にも同じ「春の魂」が吹いているからだろう。

一九八五年冬のフランスの週間雑誌『ルポアン』(*Le Point*)で「日本の教育制度の近代化とその矛盾」という記事を読んだことがある。その記事によれば、日本のある名門大学の付属小学校の入学試験に、次のような問題が出されたという。「雪(ゆき)はとけると、何(なに)になりますか」という質問に、ほとんどの子供は「みず」と答えた。しかし一人の児童は、「はる」と答えて、試験に失敗したと書かれていた。「はる」と答えた子の方が、自然を深く理解していたともいえるのではないか。その子供の方が、一茶のような感性を持っていたと僕は思う。しかしきっと、これで名門大学へ道が遠くなったのであろう。といっても、一茶の「雪とけて」の句は日本のほとんどの国語教科書に例句として揚げられているのだ。これは文学的な発想を認めない日本の教育制度の欠点を明らかに示していると、フランスの記者が述べていた。

月は単なる石の星ではない。雪は単なる水の結晶ではない。自然物にはそれ意外の本質がある。人間がこの大地に威張って棲むようになる遥かに昔から、花や鳥や風や月があった。しかし、産業先進国に住む多くの人間は、科学の力に酔ってしまい、地球という大きな生き物の権利をおろそかにするのである。一方、マザーネーチャー(“母なる自然”)に感謝せずに生きる人間は、孤児のような淋しさを覚える。母親を亡くした俳人小林一茶こそ、常にマザーネーチャーの愛情を受け入れるような姿勢を持っていた。一茶はある意味で、日本におけるエコロジー精神の父であるといっても過言ではなかろう…

我と来てあそべや親のない雀　　(おらが春)

四　鶯もなく我もなく

蛙(かはず)鳴き鶏なき東しらみけり　　(西国紀行)

蛙や鶏は、必ずしも何かを伝えるために歌うわけではない。太陽が昇ると歌いはじめ、歌うためだけに歌う。西日本からみた曙は、白々と江戸の奥からゆっくりとやってくる。旅をする一茶は、蛙や鶏のように、ただ詠うために生きている…

ちる花や鶯もなく我もなく　　(文化句帖)

実際、「鶯は鳴き我は泣く」と、違った漢字で書いた方が普通だったろうが、ここで一茶はあえてひらがなにした。しかし、常識的にいえば、鳥の鳴き方と人間の泣く様子を同じように扱うことができようか。人間と鳥との基本的な違いは、何であろうか？それは言語能力だと思う。なぜならば、人間の脳には、“言語”という奇妙な道具があるからこそ、我々自分たちの運命を意識するこ

とが出来るからなのであろう。では、なぜ、人間だけが言語能力を持っているのか？それは、人間が動物の中で一番の恐がりやだったからなのではないかと思う…　人間は死を恐れていたのか、老病を避けたかったのか、ちる花の儚さを認めたくなかったのか？…　とにかく、ある時から、人間は必死に物事を理解しようと、言語能力を発達させ、考える動物になった。だから、人間の声の本質は、泣く時も笑う時も、私利私欲である。一方、鶯は桜満開の時であろうと、落花の頃であろうと、いつも同じ歌、いつも同じしらべを演ずる。

しかし、人間の中にも、例外がある。子供や詩人という〝特別な人間〟にとっては、言語はただ運命の逃げ道を考えるための道具だけではない。言語もときに、しらべとなり、歌となる。

鶯や懐の子も口を明く　　(文化句帖)

文化時代以降の一茶の発句には、子供の声と動物の声が唱和するという題材が度々使われている。この句では、ことばの話せない赤ちゃんが、自然に鶯の歌声の真似をしたくなったのだろう。解釈によって、子供はただ腹が減ったから口を開けていると言う人もいるが・・・僕はそう思わない。というのは、先に述べたように、熟年の一茶は、子供の声と自然現象との取り合わせを頻繁に詠んでいるからだ。たとえば、

子どもらが反閉（しゃっくり）するやわか葉陰　　(文政句帖)

という句がある。こみ上げるしゃっくりは、一気に萌えてくる若葉とぴったり合う。しゃっくりの声は、〝自然、そして必然的な表現〟である。しゃっくりのような、瞬間的で、無心な表現こそ、一茶にとって、自分の句作の理想でもあった、と僕は思う。つまり、一茶にとって、〝発句はしゃっくりである〟といえるのかも知れない。俳人一茶は、古今和歌集の序文に出てくる鶯や蛙と同じように、ただ自分の感情をあるがまま吐露することが大切だったと思う。

やまとうたは、ひとのこゝろをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの、きくものにつけて、いひだせるなり。花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。

紀貫之曰く、花に鳴く鶯や池に棲む蛙、生きとし生けるものはみな、歌人の仲間である。歌人は、五感に頼りながら自然現象に圧倒されたまま、自分の感情を即興的に、非論理的に吐露する。連想やことばのリズムは、無意識に広がっていく。そう考えると、俳人は、歌人よりも短い表現に圧され、瞬間的な感動にはさらに集中しなければならないということになろう。俳人も、鳥や蛙の鳴き声のような感情表現を言葉に換えればよい、ということになる。そして一茶こそ、そのような俳人だったと思える。さて、先の四句をもう一度読んでみよう。

一句目。江戸俳壇の実力者に認められた若き一茶は、七年間の行脚に出て、関西、四国、九州まで俳人修行をつづけている。蛙と鶯の鳴き声を聴きながら旅寝の朝を迎えて、いつかは江戸の俳諧師になるという一生の夢を一句に託す。

二句目。しかし江戸に戻るが、農民の出であった一茶は、武士社会において俳諧師として認められない。そして、一茶の父親は急死する。一茶は、ちる花をみ、鶯をきいて、泣く。

三句目、四句目。故郷に帰って、一茶自身も父親になる。一茶は、赤ちゃんの片言やしゃっくりを聴いて、慈愛的な俳風を発見する。一茶調の誕生である。

結局、「真の風雅」を一茶に教えたのは、江戸の師匠竹阿や素丸ではなかった。松山の師樗堂ではなかった。無心に生きている子供たちや動物たちこそ、一茶にとって、最大の俳諧師となったのである・・・

スイスの名彫刻家ジャコメッティはこう言ったことがある。「もし、火事に囲まれた時、レンブラントの絵か、猫一匹か、どちらかをもって逃げるようにいわれたら、僕はきっと猫を抱きながら逃げるだろう」。一茶もそうしたのであろう。

火の上を上手にとぶはうかれ猫　　(七番日記)

五　一茶のサウンドスケープ

なむなむと田にも並んでなく蛙　　(文政句帖)

この句を英語に、またはフランス語に訳した場合、“なく蛙”の部分には蛙に限定されている独特の動詞（”to croak”、“croasser”）を使わなければならない。というのは、西洋人にとって蛙が発する音は、“なき声”に聞こえないからである。また、馬・牛・山羊などの“なき声”は、皆それぞれに違った呼び名を持っている。

一方、日本語では人間も動物も、同じく“なく”ことになっている。なんと蚊の羽音さえ、声とよばれることがある。以前に述べたように、一茶こそ動物の鳴き声を人間の声と混同する傾向が強かったといえる。前にとりあげた句「ちる花や鶯もなく我もなく」はその典型的な例である。今度の「なむなむ」の句をみても、蛙の声を人間の読経にたとえているところが印象的である。

角田忠信の『日本人の脳』によると、日本人の脳の構造は、西洋人と異なって、言語を扱う地域が右脳になくて、左脳に位置するとされている。それによって、言語の地域は左脳に位置する聴覚の地域と隣接しているという。だから、日本人は様々な音を言語のように捉える傾向が強いといわれている。しかし、この説に疑問を感じる。

たとえば、日本語を流暢に話せる外国人は、「虫の声」という表現をごく自然に使えるようにな

るのはなぜだろうか。むしろ、全く日本語のできない日系人の方が、「虫の声」という表現に違和感を感じるのではないか。やはり、脳の使い方も生まれつきのものではなく、人や時によって変わったりするものであろう。また、色々な言語を覚えることによって脳の構造が多様化していくのであろう。

といっても、日本語には音の詩的表現が多いのは、確かである。「古池や」や「閑さや」の句をはじめとして、日本の俳文学には、ひとつの〝サウンドスケープ〟を、いわばひとつの音風景を描いているものが多いといえるのであろう（堀切実著『芭蕉の音風景』を参照）。

そして、日本語には、音の詩的表現だけではなく、〝音そのものを模した語彙〟、いわばオノマトペも非常に多いのである。おそらく日本語ほどオノマトペの豊富な言語は、少なくとも西ヨーロッパの言語にはみあたらないのであろう。実際、オノマトペの多用は、和歌や俳句というジャンルにおいてとくに著しいといえよう。そして、芭蕉門の惟然と共に、オノマトペを多用した俳人といえば、一茶が最も著名であろう。

たとえば、以前に取り上げた「むまさうな雪がふうはりふはり哉」も、オノマトペを使用した有名な発句であるが、惟然の「水さっと鳥はふはふはふうはふは」を模したものとされている。他の例をとりあげよう。

鶯もとがとがしさや片山家　　（文化句帖）

広義ではオノマトペ（または〝声喩〟）と呼ばれている修辞的技法を、四種類に分けることができる（田守育啓著『日本語オノマトペの研究』を参照）。生き物の声を真似る擬声語、他の音を真似る擬音語、ものの状態を連想させる擬態語、そしてものの心情を想像させる擬情語といった四種類である。つまり、読経の声を「なむなむ」と表現するのは、一種の擬声語である。また、雪の状態を「ふうわふうわ」と言うのは、擬態語であろう。そして、聞き飽きた山奥の鶯の声を「とがとがし」とよぶのは、擬情語である。

一茶の作品には、どのようなオノマトペが多く使用されているかを調べると、具体性に欠ける擬態語や擬情語よりも、単純な擬声語や擬音語の方が目立っているのである。とくに、晩年の作品を読むと、口語的で、直感的に音を真似るものが多くみられる。

時鳥小舟もういういい哉　　（文政句帖）

稲妻にけらけら笑ひ仏かな　　（七番日記）

わやわやと土産をねだる鹿の子哉　　（梅塵八番）

以上の三句には、農民の出であった一茶が自然界の音を大変正確に聴いているという要素がうかがえる。時鳥の声を小舟の滑る音にたとえたり、雷鳴を笑い声にたとえたり、子鹿の声をわやわやと擬人化したりする一茶は、擬音語・擬声語の個性的な使い方を披露しているといえる。

一茶の音感の正確さ、そのユーモアに溢れた独創性は、民謡によくみる擬音語・擬声語の巧みな使い方を思わせるところが多いといえよう。実際、アフリカ、ヨーロッパのどこをみても、やはり擬音語・擬声語の多用は農村地帯の民謡の大きな特徴である。一茶晩年の作品はそのような農村的な詩的表現の伝統を継承しているといえよう。

しかし、惟然晩年の宝永期と同様に、一茶晩年の文政期において江戸俳壇は未だ口語的なオノマトペの使用を評価せず、一茶晩年の音風景に耳を貸す人は少なかった。自然の音がそのままオノマトペとなり、俳諧が民謡のように響き、文学と音楽が接近するような、一茶の豊かなサウンドスケープは、現在に至っても文学の忘れ物であるといえるかも知れない。

B・　菜畑の一服　―　近世の愛煙と一茶

一四九二年に新大陸を発見したコロンブスは、まずキューバ島に上陸した。夢にみたジパングにやっと辿り着いたと確信して、コロンブスは仲間と一緒にキューバの雨林を歩き出した。しかし、黄金の島ジパングの面影はなかった。ふと見ると、密林の中で、丸めた葉っぱに火を付け、その煙を呑む人間がいた……原住民のインディアンたちはみな親しみやすく、すぐにその草を分けてくれたという。コロンブスたちはその草のお陰で長旅の疲れが癒されたと、当時の旅日記に記録が残っているのだ。草の煙を吸うと、大自然に漂うすべての霊と仲良くなれると、インディアンたちは信じていたとも書かれている。

その後、いわる「タバコ」という草はときに愛されたり、ときに嫌われたりして、色々な形で、色々な国の文化・社会・経済に影響を与えた。ヨーロッパにしても、アジアにしても、十九世紀までは愛煙、二十世紀からは嫌煙という傾向が一般的であろう。

十八世紀のフランスでは、嗅ぎタバコのお陰で王妃カトリン・ド・メディチの頭痛が治り、それ以来、嗅ぎタバコは「女王の草」と呼ばれ、次第に貴族階級に親しまれていった。一方、船乗りや軍人の間では、パイプが大流行した。十九世紀になると、バイロン、ボードレール、サンドなどといったダンディーな詩人や作家たちは、キューバ産の葉巻煙草を愛し、煙草に多くの讃歌を捧げた。ボードレールの一節を詠んでみよう。

> 私たちは何種類かの葉巻をゆっくりとくゆらせたが、その比類（たぐい）ない風味と香りは、未知の国々と未知の幸福への郷愁（ノスタルジア）を魂にそそったのであり、こうした快楽のすべてに酔った…
>
> （「気前のよい賭博者」『パリの憂鬱』より）

日本では、十八世紀から、ポルトガルやオランダの船乗りが持ってきたパイプや葉巻煙草が始まりで、喫煙の習慣はまたたく間に広がり、十七世紀初頭にはすでに武士・町人・婦女子といわずキセルを愛好するようになったという。幕府は火事防止のために一六〇九年にはやくも喫煙禁令を出したが、その禁制も有名無実、喫煙の習慣は次第に庶民に広がった。もともとキューバのインディアンの言葉であった「タバコ」という単語は、ポルトガル語を経由し、日本語の日常語になってしまった。「莨」、「多葉粉」、「淡婆姑」、「佗波古」、「長命草」などと、江戸時代に使われた「タバコ」の当て字は非常に多い。江戸初期の俳文にも煙草を讃えるような文章が多く残っている。たとえば、横井也有作「煙草ノ説」（『鶉衣』本文延享二年成立）に次の文がある。

> 夜道の旅のねぶたきとて腰に茶瓶も提（さげ）られず、秋の寝覚の淋しきとて棚の餅にも手のとゞかねば、

只此（この）煙草の友となるこそ琴詩酒の三つにも増るべけれ。

江戸時代の俳人は、芭蕉を含めて、みな喜んでキセルをくわえたといえよう。芭蕉の弟子、惟然によると、

たば粉呑ぬ傾城と菓子くはぬ俳諧師はすくなきもの

（浪化宛芭蕉書簡に引用）

といわれており、元禄にすでに喫煙が社交の場に欠かせない習慣だったということがうかがえる。最近、雲英末雄氏が紹介された『たばこ集』（一八六五年刊行）という俳書には、芭蕉の弟子の句や芭蕉の一句などが収められている。

春風やきせるくわへて船頭殿　祖翁

ともかく、堀切実氏の研究『俳文史研究序説』に書かれているように、当時では、

たばこ有益論―その精神的効用と社会上の役割を評価する点が支配的である。したがって、当今話題になっている嫌煙権の問題などは、どこを探しても出てこないのである。

といえよう。

さて、一茶の煙草の句はどうだろう？『一茶全集』に調べてみると、煙草を題材にした発句数は百句近くにのぼり、しかもほとんどは文化七年以降の作に限るということがわかる。晩年の一茶は、刻みタバコに結構な予算を使っていたという記録も残っている。やはり、一茶が帰郷して経済的にも精神的にもゆとりがでた時期から、煙草の句が急増したと考えられる。例として次の二句をとりあげよう。

ちる花にけぶりの嗅（にほ）いたばこ哉（七番日記、文化八）

参詣のたばこにむせな雀の子（七番日記、文化一一）

桜の香りを消す程の煙草の臭い、参拝者の紫煙にむせる雀の子　―　いずれも、煙草という人間的題材と自然界を対立させるような、一種の社会的滑稽をもった俳味がここにみられるだろう。また、

猿丸がきせる加へて梅の花（七番日記、文化一二）

という句には、一茶の俳友猿丸の優雅な手振りと梅の花との取り合わせによって、煙草の社交的なイメージが俳諧的な挨拶に使われているといえよう。文化後期まで、一茶にとって、煙草は主に社交的な意味合いをほのめかす題材であり、富の象徴であり、どちらかというと一茶自身の喫煙よりも、人の喫煙を詠んだ発句の方が多いようにみられる。しかし、文化時代が終わる頃には一茶の煙草の詠み方は、「自分の喫煙」が中心となり、やっと辿り着いた金銭的・精神的なゆとりを表現するような明るい発句がよくみられるようになる。たとえば次の句がある。

春風に二番たばこのけぶり哉　　（七番日記、文化一二）

花さくや伊達に加へし殻きせる　（七番日記、文政一）

最後に、最晩年には、一茶の煙草の句に別の要素が現れているように思える。たとえば、

かすむ程たばこ吹（ふき）つゝ若菜つみ（書簡、政四）

一葉二葉たばこの上に若な哉（文政句帖、文政七）

のような発句には、社会的な喫煙の素描もなく、「自慢の喫煙」という趣味もみられない。どちらかというと、農村の日常生活の中の喫煙、こく自然で素朴な煙草の詠み方が著しい。同じような発想として、次の句もある。

菜畑やたばこ吹く間の雪げ川（八番日記、文政五）

農作業中、一休みをする一茶。信州の雪解川を眺めながら、一茶はこだわりの刻み煙草を楽しんでいるだろう。晩年一茶の煙草の句は、もう社交的な喫煙によるものではない。ある意味で、キューバのインディアンがコロンブスに言ったように、大自然に漂うすべての霊と仲良くなるための心の糧だったかも知れない。現代人の紙巻タバコによるニコチン中毒とは無縁のものであり、晩年の穏やかな一茶、土の俳人ならではの生き方の一部になっていたに違いない。